里山を利用した農耕活動の啓蒙
～地域活性化のために～

広島工業大学　　正会員　　今川朱美
広島工業大学大学院　学生会員　○村上大輔

1. 研究の背景と目的

日本の農村集落は時代の流れとともに、その位置づけや存在意義、都市との関係性を転換してきた。近年、農村人口の都市流出が進み、少子高齢化社会の到来も相まって、農村集落は衰退傾向にある。特に中山間地域では超高齢化に加え、後継者不足から耕作地の放置が進み崩壊状態であり、地域活性化が望まれている。中山間地域の衰退は人為的な問題にとどまらず、地域資源の喪失の危機とも直面している。その主たるものとして、里山が挙げられる。里山は、燃料や資材、肥料などの供給源として農村住民の生活を支えてきたが、燃料革命以降、生活様式の変化や農業の担い手不足によりその役割りは薄れてしまった。また、国内の人工林の面積は、昭和 41 年から平成 19 年の間ほぼ一定であるが、その内、管理不足の見られる人工林の蓄積は 558 百万㎥(S41)から 2,651 百万㎥(H19)と約5倍に増加している。このことから、二次的自然が構成要素でもある里山の荒廃が見て取れる。里山は、人的管理を必要とするが、人手不足や利用価値の低下による管理不足等が起因している。

その一方で、都市から農村への I･U ターン者や新規就農者は平成7年頃より増加の動向が見られる。環境問題への関心から自然志向が高まり、人々の農業に対する関心や自然とのふれあいへの意欲が強まった。「環境保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律(H16)」も施行され、持続可能な社会づくりへの基盤づくりのためにも環境教育が重要視されるようになった。学校教育活動、自治体や企業に留まらず、個人の意識の高まりからニーズが高まり、各地で環境教育の試みが実施され、中山間地域の多様な機能が見直されつつある。

本研究では、中山間地域の地域活性化を目的とし、利用価値の薄れてしまった里山、地域衰退により耕作放棄された農地を積極的に利用する「滞在・交流型農耕施設」のシステムを提案するものである。また、施設で行う環境教育プログラムの試験的な取組みを実施し、他の活動事例と比較し、考察を行う。

2. 里山を利用した地域活性化への展望

前述した社会の動きや中山間地域の問題解決策を模索した結果、地域活性化のツールとして日本特有の地域資源である里山の利用に可能性を見出した。里山は重要な地域資源として、多面的な機能を持ち、整備・利用を行うことで、地域に多くの恩恵を与える可能性を有している。また、近年の環境基本法の改正等により、里山の重要性が認められている。

里山の多面的な機能は整備や維持・管理があって初めて発揮することができる。そのためには、まちづくりの一環として地域の特性や問題に個々に応じた里山の活用法をプログラムすることにより、地域活性化につながることが期待できる。また、先に述べたように、環境問題に対する人々の認識や環境教育・環境活動に対するニーズの高まり、都市部住民のレクリエーションや環境教育の場としての意義も見出すことができると考える。

3. 滞在・交流型農耕コミュニティハウスの提案

今回は、母都市(人口約98.1万人)から40km圏内に位置する M 町(人口約2.2万人)のケーススタディとして、①農地と里山の活用のコネクション、②農地の市民農園化、③里山のエコパーク化を提案した。

耕作放棄された農地を含む荒廃した里山で、環境教育や地域の憩いの場の創出を試みる。地域の資源供給や環境教育の場として位置づけらる欧州諸国のエコパークの要素を取り入れ、中山間地域の里山のエコパーク化と、農地の市民農園化によって、都市住民の地域滞在を促進する。里山と都市住民を結びつけるためのツールとして①「滞在・交流施設」の整備、②里山整備や維持管理のプログラム、③農耕活動とその支援策、④環境教育プログラム、⑤伝統文化の継承をあげ、具体的な計画案を提示する。

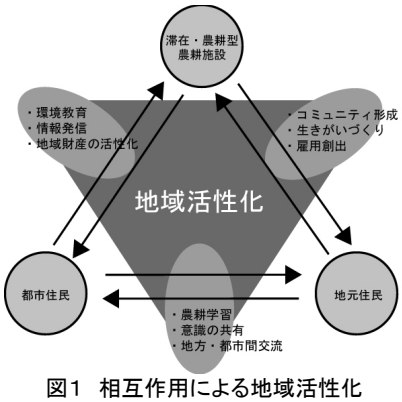

図1　相互作用による地域活性化

核となる「滞在・交流施設」は、管理・運営機能を備えたコミュニティーハウス(＝ファームハウスと呼ぶ)である。都市からの施設利用者が地元(地域)住民と共に施設と農園・里山で活動することにより、都市(都市住民)と地域(地域住民)をつなげる役割を果たす。また、農耕活動や環境活動を通じ、地元－都市の関係だけでなく地元－地元・都市－都市のつながり(コネクション)を構築できる。その結果、地域

活性化が大いに期待できる(図1)。

ファームハウスでは、地元住民と施設利用者により結成される組合によって、講習会やイベント等の充実を図る。また、里山の整備や管理等の環境活動や環境教育プログラムを取り入れ、地域資源である里山有効活用する。施設管理や指導は主に地元の組合員が担い、土地管理や利用者へのバックアップなどを役所が行う。施設利用者である都市住民は、地元住民の働きに対し代価を支払う。経済と人と物の交流が確立することになり、地域活性化の裏打ちとなる。ファームハウスの整備により地域住民や都市住民の①レクリエーション・交流の場、②環境教育や生涯学習の基地として地域住民の生きがいや活力となり、③コミュニティの形成や新たな産業や雇用の創出等が望め、地域活性化につながるものと考える。

4. 活動実験による環境教育の効果の実証

ファームハウスで環境教育を実施するため、活動実験として広島県廿日市市の私立幼稚園児 30 人を対象した落花生堀りの体験学習を実施した。体験事前にキャラクターや紙芝居による、クイズを交えたお話の会を開催し、落花生の生態と食物としての特性を学習し、一週間後に落花生掘りを実施した。事前学習時に挙手によるアンケート調査、体験学習後に園児とその保護者を対象に書面によるアンケートを行った。

落花生掘りを行う園児達には笑顔や驚きの表情が見られ、体験が終わる頃には全員が落花生を好きになっていた。また、アンケート調査の結果からも、事前の調査では、30 人中 24 人が落花生を食べたことがあり、15 人が落花生を苦手としていたが、28 人が体験を楽しかったと答え、落花生を好き回答している。体験後に収穫した落花生を茎と共に持ち帰ってもらったこともあり、体験した園児全員が過程において家族と共に落花生について振り返りを行なっている。保護者からは、「小さいうちから自然に親しみ、自然から様々なことを学ぶのは、大切なこと。その中から、生きる喜び、暮らしの楽しみを知り、住環境(まち)への関心を持つようになるのではないか。」という意見もあり、今回の環境教育の実験では、体験者である子どもへの教育的効果だけでなく、その家族へも食や地域環境について考える機会ともなった。

5. 環境教育事例との比較

前述したように全国で多くの環境教育への取組みが行われている。そこで、本研究で行った実験と他の取り組みの事例を比較し、考察を行う(表1)。

比較の結果から、『興味』と『身近』の2点が浮かびあがる。4つの取組みには遊びやキャラクターなど子ども達の『興味』を引くものが含まれている。遊びを通して自然に触れることで、環境への関心や問題意識の導入につながると考えられる。また、地域や学校、食べ物などの『身近』なものを題材とし、それらを更に深く知ることで、環境だけでなく地域に目が向けられると考える。

表1. 環境教育事例の効果と特徴

名称	取組	効果	特徴
落花生掘(広島市佐伯区)	幼稚園児へのキャラクターを用いた事前講義及びピーナッツ掘り体験活動の実施。	ピーナッツへの関心・知識の高まり。保護者の環境活動への意欲向上などの効果もあった。	ピーナッツに的を絞り、環境教育を行った。
ドリカムスクール『山の力』(島根県柿木村)	小学生が対象。生き物のビンゴ等のゲームや樹木の伐採、薪割り体験など。	ゲームや人々との交流を通し、地域を改めて知る機会となった。	地域の人と子ども達の交流と文化の伝承。
山・川・海をつなぐ森林環境教室(青森県)	小学校高学年が対象。ネイチャーゲームや間伐体験、水産・農山教室の開催。	森林と水の関わりや、森林整備の必要性、農水産物と水のつながりを理解。	授業的で多岐に渡る内容の取り組みである。
学校の木を知ろう(佐賀県佐賀市)	県内小中学校で木の葉カルタや木の図鑑づくりなどの活動の実施。	生徒は活動に積極的に取組み、樹木や生き物の種類などにも関心を示している。	学校という身近な施設を利用。

6. まとめ

活性化とは「沈滞していた機能が活発に働くようになること、また、そのようにすること」と定義される。

滞在・交流施設(ファームハウス)を拠点とし、農地(市民農園)と里山(エコパーク)の連動による、農耕活動および環境活動を通し、空間のコネクションと人と人のコミュニケーションを活発化し、生活環境の改善が期待できる。これらの活動が波及し、相乗的に意欲が向上することが「まちづくり(村おこし)」につながると考える。

また、本研究で行った環境教育の実験では、子ども達が身近であるが、生長過程のわからない食物(落花生)を知ることにより、自然への興味と楽しみにつながったと考える。また、体験者である子どもの身近な家族も、家庭菜園への意欲を持ち、食育や地域環境について考えるきっかけとなり、子どもの体験は家族に波及することがわかった。このような活動を里山・農園で行うことにより、地域への愛着の芽生え、地域保全の知識をもって地域の育成につとめ人材の育成にも繋がるものと考える。

＜参考文献＞

1) 小田切徳美「持続可能な国土管理に向けての展望 ～農村地域を中心にして～」2006
2) 竹内和彦・鷲谷いづみ・恒川篤史「里山の環境学」東京大学出版会 2001
3) 山口廣「郊外住宅地の系譜・東京の田園ユートピア」鹿島出版会 1987
4) (財)都市農山漁村交流活性化機構「都市住民のグリーン・ツーリズムの行動を活性化させる新たな手法」2007
5) 依田浩敏・池智大「田川市民農園の設計提案」2007
6) 財団法人農村開発企画委員会「転換期農村像の探求—新しい農村のかたち—」2001